

第2学年 生活科 実践報告

指導者 奈良市立飛鳥小学校

教諭 圓山 裕史

1. 単元名 こうえんはかせになろう！

2. 単元の目標

- ・公園探検を通して、自分自身や身近な人々、社会や自然等の関係や関連に気付く。
(知識・技能)
- ・身近な人々、社会や自然を自分との関りで捉え、自分の生活について考え、表現する。
(思考・判断・表現)
- ・身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信を持って学んだり、生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。
(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

校区には、様々な公園があるが、紀寺児童公園（ロケット公園）、南紀寺街区公園（タイヤ公園）、東山緑地公園（アヒル公園）の3つは特に馴染みが深く、放課後にもよく遊んでいる姿が見られる。この3つの公園は広さや設置してある遊具などが違って比較しやすい。また南紀寺街区公園は「タイヤ公園」と児童は呼んでいるが、タイヤがないので「タイヤなし公園」と呼ぶ児童もいて、「なぜタイヤ公園にはタイヤがないのだろう。」「タイヤの遊具は復活するのか。」といった疑問も生まれるであろう。実は、3年ほど前にタイヤの遊具は破損が見られるとの自治会からの要請で奈良市公園緑地課により撤去され、新たな遊具を設置する予算が回ってくる順番待ちである。

こういったことから、公園はなにもしなくてもそこにあるものではなく、身近な人々や社会との関りがあって自分たちが遊べる場所であるということに気付かせたい。

SDGsとの関連としては、低学年ながらも公園をこれからも使っていけるように、世代間公正の価値観やゴール11.「住み続けられるまちづくりを」を達成していけるような素地を養いたい。

(2) 児童観

この3つの公園を知っている児童が多数であるが、まだ2年生ということもあって、3つの公園の中でも行ったことがない公園がある児童もいたり、校区外から通学している児童や、放課後は学童保育や習い事に通い、公園で遊ぶ機会少ない児童もいたりする。

また、授業前に学級の26名に公園で遊ぶ機会について聞いてみると、「よく遊ぶ」と答えた児童は8人で、「たまに遊ぶ」が15人、「ほとんど行かない」と答えた児童が3人だった。ライフスタイルやゲームなど遊び方の変化もあって、公園で遊ぶ機会が少なくなっているのであろう。公園探検を通して、健康や安全に関わること、みんなで生活するためのきまりに関わることなど、生活上必要な習慣を身に付けさせたい。

(3) 指導観

公園に調査に行くときには、「すてき」にもなぜ「すてき」なのかということ言語化させる。例えば「ロ

ケットの形がすてき。」ではなく、「ロケットの形の中に色々な遊具が集まっています。」であるとか、「パイロットになった気分になれるからすてき。」といったように理由も加えて話せるようにしたい。

また、話し合う場面では、ただ「この公園はこんな遊具があるからすてき。」「池や自然があってすてき。」など、その公園の特徴をまとめるような活動で終わるのではなく、3つの公園を比べたり、分類したりすることによって、ある気付きと別の気付きの共通点や相違点、それぞれの関係や関連を確認して気付きの質を高めていきたい。話し合う中で答えの出る「はてな？」もあるであろうが、児童だけでは答えが出ないものや、気付きの質を高めていく中で生まれる「はてな？」もあるだろう。その解決のためにゲストティーチャー（奈良市公園緑地課、自治会長など）に話を聞いたり、質問したりできる時間を設定しておく。

そういった活動の中で気付いてほしい点は、整備されているということである。タイヤ公園の例は遊具に関わってであるが、その他にも草刈りが行われていたり、落ち葉やごみなども地域の人々や行政によって処理されていたりと、誰かによって管理・整備されているということである。それに気付くことで、公園に関して、身近な人々、社会や自然を自分との関りで捉え、公園というみんな（いろいろな世代）の場所だからこそ、誰もがずっと使えるように自分たちの公園の使い方を考え、行動化していくことができるようにしたい。

（４）ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【多様性】：3つの公園を調べ、比べることで公園の多様性に気づくことができる。

【連携性】：奈良市公園緑地課の人から話を聞き、行政と地域が協力して公園を管理していることに気づくことができる。

【責任性】：公園がこれからもきれいで安全であるためには、自分たちも公園を利用する地域の一人として責任があることに気づくことができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

<コミュニケーション力>

公園の「すてき」「はてな？」を話し合う際には、理由をつけて話すようにし、発表のスキルとしてのコミュニケーション力を育てる。

<システムズシンキング>

公園を様々な視点から多面的に捉えることでシステムズシンキングの基礎を育む。例えば、公園調査では利用者という視点で捉えさせ、ゲストティーチャーの話からは、管理という視点で捉えさせる。

4. 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①公園の「すてき」や「はてな？」を見つける。 ②身近な人々、社会や自然等の関係や関連に気付き、生活上必要な習慣を身に付ける。	①「すてき」や「はてな？」を比べたり、分類したりして考えている。 ②自分との関りで捉え、意見を言うことができている。	①意欲や自信をもって話し合ったり、ゲストティーチャーから学んだりしている。

5. 単元展開の概要

全12時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価 ・備考
<p>1. めざせ！こうえんはかせ！！ 公園について知っていることを発表する。</p> <p>2. こうえんちょうさ①～③ 「すてき」や「はてな？」をさがす。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>こうえんちょうさで気づいた「すてき」や「はてな？」を話し合う。</p> <p>※3つの公園で調査→話し合いをそれぞれ行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 校区にある公園の名前を確認したり、どんな遊具があるかを聞いたりして、公園について思い出せるようにする。 気づきが足りないと思われる児童には声をかける。 振り返りのために写真を撮っておく。 「すてき」や「はてな？」について写真を確認しながら確認する。 比べたり、分類したりすることによって、共通点や相違点、その関係や関連を考えることができるようにする。 次回のゲストティーチャーへの質問も考えておく。 	<p>①公園の「すてき」や「はてな？」を見つける。(知・技)</p> <p>①「すてき」や「はてな？」を比べたり、分類したりして考えている。</p> <p>②自分との関りで捉え、意見を言うことができている。(思・判・表)</p>
		<p>①意欲や自信をもって話し合ったり、ゲストティーチャーから学んだりしている。(主)</p>
<p>3. こうえんをつくる人に聞いてみよう。</p>  <p>4. こうえんをこれからも楽しくつかおう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 奈良市公園緑地課との事前の打ち合わせで児童の質問なども確認しておく。 自分たちで調べたことやゲストティーチャーからの話を振り返りながら、考えられるようにする。 	<p>②身近な人々、社会や自然等の関係や関連に気づき、生活上必要な習慣を身に付ける。(知・技)</p>

6. 成果と課題

今回の実践による成果を次の三点から考察を述べる。(1)行政と地域の連携について、(2)対話的で深い学びについて、(3)児童の変容についてである。

(1)行政と市民の連携について

児童は公園探検をしていく中で、「木が倒れないように補強してある。」「花が植えてある。」「草刈りがされている。」といったようなことを見つけ、「誰かが公園を管理している」ということに気付いていた。そして、どの公園にも設置されている看板に「奈良市」や、「奈良市公園緑地課」と書かれているのを見つけ、「公園は奈良市が管理しているのではないか。」という予想を立てることができた。そこで、奈良市公園緑地課の職員から話を聞くことで、公園は奈良市と地域の人が協力して管理しているというつながり（連携性）に気付くことができた。さらには、自分たちと地域、そして奈良市との関係について構造的に考える児童も出てきた。

例えば「タイヤ公園のタイヤがなぜなくなったのか。」という疑問に対して、学習前には「誰かがけがをしたらしい。」といった噂でしか理解をしていなかったが、自治会から「劣化により危ない」という要請を受け、奈良市が撤去を行ったという事実を知り、「新しい遊具を自治会長さんをお願いしてもらいたい。」と振り返りに書いている児童も見られた。これは、システムズシンキングの基礎が育まれたと考えられる。

また、今回調べた三つの公園は、それぞれ街区公園・児童公園・緑地と別れており、遊具だけでなく健康に配慮したベンチや屋根付きの休憩所なども設置されていたり、池や遊歩道など自然を活かしていたりと、公園が子どもだけでなく地域の人みんなの憩いの場所になっていることに、公園の多様性の良さにも気付くことができた。

(2)対話的で深い学びについて

自分が見つけた公園の「すてき」を話す際には、理由もつけて話すようにしていたので、調べる段階から気付きの質や発表のスキルとしてのコミュニケーション力の向上は図ることができた。さらに、三つの公園を調べるために、「調べる→共有する」を繰り返すことで、段々と質の高まりを感じることもできた。

また、「ブランコの座るところがゴムになっている。」と気付いた児童に対して「学校のブランコは座るところがかたいけど、これなら安全だね。」と話していたり、「防」の文字がついた倉庫を見つけ、「学校にも同じ文字がついた倉庫があったよ。」と学校に帰って、何が入っている倉庫なのかを確かめたりと比較をしながら対話的に活動し、質の高い気付きを見ることもできた。

(3)児童の変容について

最後に、自分たちにできることを考える場面では、「ごみを拾う」であるとか「自治会の草刈りや落ち葉拾いに参加する」など、公園をきれいにする地域の活動に参加したいと多くの児童が書いていた。これは、公園を利用する地域の一人としての責任性の芽生えや、誰もが公園を気持ちよく使えるようにと、いった世代内公正の価値観を少し持つことができたと考えられる。このことから、本実践を通してSDGsの目標11【住み続けられるまちづくりを】達成していくための素地を低学年ながらに育成することができたと考える。

